
おともだちとすごすぼくのがくえんせいかつ

金魚さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おともだちとすこすぼくのがくえんせいかつ

【Nコード】

N3583P

【作者名】

金魚さん

【あらすじ】

あらすじ↓どこにでもいる主人公（男）の平凡すぎてつまらない
学園生活

フミカとイクヨ——その顔と目玉（前書き）

次回更新は数ヶ月以内予定。意味なしオチなしヤマなし量なし質なし文章力なし語彙なしの無い無い尽くしです。時間を無駄にしたくなければ即刻引き返すこと推奨。

フミカとイクヨー——その顔と目玉

今日は僕の学校の友人である姉妹の話をしようとおもう。

彼女達は僕の握りこぶしより一回りか二回りほど大きい目玉を持っている。

それは顔の口から上のほとんどを占めていて、一つ目を鼻で区切って無理やり二つに分けたのではないかというほどだ。

姉のフミカはツインテールがよく似合っている。髪の色は我々ホニン人のほぼすべてを占めるホニン民族によく見られる黒色だ。

瞳の色も無論黒だ。瞳孔はとても大きく、眼球のほとんどを占めている。だから彼女が眼球を動かしてもあまりよくわからない。でも動物のように眼球をすべて瞳が占めているというわけではなくて、どこを見ているのかわかる程度には白目もあるのだ。うつそりと動く彼女の瞳は迫力満点だ。

口は確かに大きめだが、こちらは取り立てて書きたてるような特徴はない。せいぜい握りこぶし二つを加えられる程度だ。けれども、その唇は桜色をしていて実にかわいらしい。何度か変質者に噛み千切られたと本人は自慢層に言っていた。そのせいなのか少し引きつっているような気がしないでもない。なるほど、確かに噛み千切りたくなるかわいさだ。

妹のイクミはポニーテールがよく似合っている。瞳と髪の色は姉と同様ホニン人によく見られる黒だ。姉のフミカと違うのはその瞳孔の大きさだ。眼球の大きさは僕の握りこぶしより一回りも二回りも大きいのに、その瞳孔は僕の瞳孔より一回りも二回りも小さいのだ。だから彼女は瞳をいつもぐりんぐりと激しく動かしている。それ

が急に一点を見つめて静止すると、まるで武器の照準を当てているようだ。

二人の目玉はとても大きい。だから僕は常々二人の両親は一つ目巨人と三つ目小僧ではないかと勘ぐっている。未だ二人の両親の話を聞いたこともあったこともないから事の真偽はわからないのだけだ。

勘ぐっている事といえば実はもう一つあるのだ。どうみても彼女達の目玉は頭蓋骨に収まる大きさではないのだ。だから僕はたぶん中で互いを押し合いへし合いしてゴリゴリガリガリ削れていつてんじゃないかなろうかと思っている。大きさから考えて、眼球二つと脳みその三つの球体が彼女らの頭の中で熾烈な争いを繰り広げているに違いない。

姉のフミカより妹のイクヨの方が若干頭が軽いのはきつとよく目玉をグリグリ回すせいで脳みそがいっぱい削れているんだろう。

そして最後に、これが一番重要なことなんだが、二人は飛び切りの美人なのだ。

それも少し吊り目がちなのだ。

耳元まで口の端を吊り上げた飛び切りの笑顔ときたら、アイドルも顔負けだろう。

これが僕の仲のいい姉妹だ。

深夜のテンションでヤヴァい。

読み返した黒歴史作品でさらにヤバイ。

書き上げた作品読み上げたらますますくる。

誤字脱字文体等々気になるところは山ほどあるような気がするけど
投稿するぜ。

フミカとイクヨー——その顔と目玉（後書き）

深夜のテンションでヤヴァい。

読み返した黒歴史作品でさらにヤバイ。

書き上げた作品読み上げたらますますくる。

誤字脱字文体等々気になるところは山ほどあるような気がするけど
投稿するぜ

登校風景

月曜日というのは実に憂鬱なものである。

別段学校が嫌いなわけではなく、むしろ学校に通うことが大好きだという人間でさえ月曜日は嫌いだという。

学校が好きすぎて休みの日も学校に通うやつも、学校に住み込むほど学校に惚れこんでいるやつも、月曜日は憂鬱だという。

月曜日というのは人を憂鬱にさせる魔力を持っていると、僕は信じている。

「おはよう、しけた顔してるわねユミヒコ」

「おはようユミヒコ君。月曜日だからってしよぼくれ過ぎよ」

後ろから金切り声一步手前の甲高い声とよく通る野太い声が聞こえてきた。

フミカとイクヨだ。

「二人ともおはよう。月曜だもの、しよぼくれるのも仕方ないよ」

「そうね、まあね、月曜だもんね。しゃーないわよね。」

「そうよね、月曜だもんね」

思わずそろってため息をつく。

月曜なのだ。ため息の一つや二つこぼれもする。

「何よりめんどくさいのは学園町の朝礼よね」

ハアツとさらにため息を重ねてフミカ。

「そうそう。今日は何人ぐらい死んだのかしらね」

「まあ、月曜だから仕方ない気はするけどね。でも、てめえが自殺したせいで朝礼が伸びるこっちの身にもなってみろってんだよ」

「本当にね。あー、もう月曜の朝礼ほど嫌なものってそうそうないわね。なんだか私も自殺したくなってきたわ」

「ちよっとやめてよねイクヨ。あんたが死んだらさらに朝礼伸びるじゃない」

「うっさいわねフミヨ。だったらあんたも死ねばいい話でしょ？」

「おいおい、話が変な方向進んでるぞ。まあいいけどさ、とりあえず一応聞くけど朝礼抜ける方法なんか思いついた？」

「思いつくわけないでしょ。遅刻したら録音を2回聞かされる、ばっくれても休んでも学園長自らわざわざ朝礼をそっくりそのまま演説しに来てくださる。噂じゃああの世まで自殺した生徒追っかけて演説ぶってるらしいよ」

「ないと言い切れないのが怖いわね」

「なんでも本人に向けた弔辞もそっくりそのままぶちかますらしいわよ」

「そりゃきつい」

「はあ、憂鬱ねえ」

再び三人そろってため息をこぼす。

その時、彼らの少し後ろで叫び声があがる。

「そうか、死ねば朝礼に出なくてすむぞ！」

振り返るとオウムのような嘴がくっついた少年が満面の笑みを浮かべながらナイフを自分の腹につきたてようとしていた。

「おいまて！ お前が死んだらさらに学園町の演説が長引くだろうがあっ！」

死んだらてめえ、ぶっ殺すぞゴラァー！！」

思わず罵声が口をついて出る。全力でその馬鹿の自殺を止めるために僕は飛び出した。

大体一人当たり30フウンほど演説が伸びるのだ。後ろのほうではさらに姉妹が飛び掛る音が聞こえた。

登校風景（後書き）

眠い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3583p/>

おともだちとすごすぼくのがくえんせいかつ

2010年12月7日14時50分発行